様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２２年　５月１２日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2007 年度～2010 年度
課題番号：19530570
研究課題名（和文）　スティグマ化されたリスクの知覚：感情と公正のヒューリスティックモデル
研究課題名（英文）　Perception of stigmatized risks: Psychological model of affect and fairness

研究代表者　竹西　亜古（TAKENISHI AKO）
兵庫教育大学　学校教育研究科　教授

研究者番号：２０２８９０１０

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：リスク知覚・ヒューリスティック・感情・心理的公正・手続き的公正

１．研究計画の概要

(1) 本研究は、スティグマ化されたリスクに対する市民評価の心的過程を、感情反応と心理的公正に関するヒューリスティックを中心に、実験と調査を組み合わせて解明するものである。目的１は、感情反応および心理的公正がリスク知覚時のヒューリスティックとして機能しうることを実験的に示すことである。目的２は、感情と公正のヒューリスティックを含めたリスク知覚の心的過程をモデル化し、市民を対象とした調査により検証することである。本研究は、これら２つ目的を達成することにより、リスクコミュニケーションやリスク政策上の基盤的知見を得るとともに、市民のリスクリテラシー向上の方法を開発する手がかりを付与するものである。

(2) 本研究が期間内に明らかにしようとする内容は、以下の４点である。

① 暗黙連想法(IAT)を用いた反応潜時実験を大学生を参加者として行い、スティグマ化されたリスクの知覚において、感情反応と直感的公正感がヒューリスティックとして機能しうることを示す。

② 上記の実験結果から、感情ヒューリスティック・公正ヒューリスティックの言語化された測定指標を作成する。

③ スティグマ化されたリスクの評価に関する市民の心的過程を潜在構造モデルとして構築し、有権者を対象とした調査データで検証する。

④ モデルの検証作業を通じて、スティグマ化されたリスクに対する市民の評価・受容・理解に影響する要因を、感情・公正ヒューリスティックを含めて検討し、市民に対するリスクコミュニケーションのあり方、市民のリスクリテラシーを向上させる手法の開発に示唆をあたえる。

２．研究の進捗状況

本研究課題の特色は、スティグマ化されたリスク知覚に対する一般市民の知覚、すなわち過剰危険認知にいたる心的過程を、実験と調査の２手法を組み合わせて明らかにすることにある。研究計画は年次進行で行われており、2009 年度に暗黙連想法(IAT)による実験と予備調査、2009 年度に Web 本調査によるデータ収集が終了した。それぞれで得られた知見を総合的に考察し、論文化する作業は 2010 度に行われる。現時点までに得られた成果は以下の通りである。

(1) スティグマ化されたリスク対象として原発および原子力を取り上げ、連想するイメージおよび感情反応を回答させた調査から、正負の連想イメージ（廃棄物などの副産物や爆弾とエコロジー貢献）が混在し、否定的感情の喚起が強いことが明らかにされ、感情と心理的公正がスティグマ化されたリスク知覚に重要な役割を果たすことを示した。

(2) 上記の結果に基づき、スティグマ化されたリスクに対する潜在的態度を測定する実験ソフト「リスク対象暗黙連想法ソフト」を開発した。

(3) 開発したソフトを用いて大学生を対象とした反応潜時実験を行い、スティグマ化されたリスクにおいては知覚者自身も意識しない直感的なイメージや判断が重要な働きをすることを明らかにした。

(4) 上記の知見に立脚し、スティグマ化されたリスク対象に対する一般市民の心理過程を検討するため、原発と遺伝子組換食品(GMF)を対象に、

Web 調査（国勢調査をベースにした比例抽出による回答者決定法による）を行い、感情と公正のヒューリスティックモデルの検証を行った。

３．現在までの達成度
②　おおむね順調に進展している。
（理由）本研究のポイントである実験と調査の２側面からの検討に関して、IAT 実験と Web 調査が、研究計画の３年次までに終了しており、最終年度に両結果の総合的検討と論文化の作業が行えるため。

４．今後の研究の推進方策
　前述したように、本研究課題の最終目的は２つの異なる手法で得られた知見を統合し学術的に公表することである。そのため、スティグマ化されたリスクに対する一般人の心的反応を総合的に解釈しうる理論的枠組みを考察する。それと同時に、本研究課題では、得られた知見の現場還元を視野に入れている。本研究の成果に基づいて、スティグマ化された対象のリスクコミュニケーションのあり方やリスクリテラシー向上の方法を提言していく。具体的には、研究代表者が現在関わっている電力消費地の市民に対する原発リスクコミュニケーションの取り組みの中で、本研究が明らかにしたスティグマ化されたリスク知覚の特徴をコミュニケーションの受け手（市民）送り手（電力会社）の双方に広く伝える活動を行う。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

現時点ではなし。